

発表者 谷口 充之

テーマ 「学校・家庭・地域の連携による教育について」

このテーマで発表します。私は前職の大学で、企業や自治体、高等学校と学外・地域連携協定に携わった経験があります。そのときに感じていたことなのですが連携協定というのは、加わった学生にも多くのメリットがありました。それは学生が社会人と共にモノ作りをしていく中で、企画力やプレゼン能力などいろんな力を養えて、その結果、参加した多くの学生が志望する企業に就職していきました。そこで感じたことは、連携活動というのは双方に利益があると感じていました。今回、中野区という大きなテーマになるのですが、以下の5つの視点で考えてみました。①学校・家庭・地域の三者が連携することの重要性とは、②これからこの多様化する社会を生き抜く子どもたちに求められる能力とはどんなものか、③地域社会の資源ってどの程度あるのか、また④地域連携活動を常に見直していくという作業と加えて、⑤その活動に参加したくなる仕組みです。

まず1つは、中央教育審議会の答申で、10年前に出されたものですがけれども、その重要性について触れています。その要旨は、単に学校だけでなく、学校・家庭・地域、それぞれが適切な役割を果たしつつ、相互に連携して行われることが重要であると。

2つめは、これは行政サイドへのメッセージとしてですが、「地域と共に子育てをする視点を持った学校の運営が求められる」とあります。

さらに「学校側が家庭や地域に対して、積極的に働きかけを行っていく」べきですよと書いてあります。10年前に出された指針ですが、中野区もこうした指針を踏まえ、これまでの連携活動を促進されてきたと思います。

そこで、学外連携の役割を私なりに考えてみたのですがけれども、それは子どもたちが今後、この多様化時代に求められる中で、生きていくために身につけていく経験・知識だと思い考えてみました。

この図は学校で学ぶ読み、書き計算です。私たちが普段認知能力と呼んでいるものですが、最近、新たにそれプラスした、右側部分の非認知能力というものが大事だと言われています。それは意欲、客観性、忍耐力、自制心、思いやり、コミュニケーション能力ですね。こうした能力は、学校よりも家庭や地域で体験的に学びながら、養っていく能力だとされています。

私も現在、児童相談所の保護所で働いていますが、特に暴力や暴言を出してしまう子どもは、こうした能力が欠けているのがよく分かります。具体的に言うと、「ありがとう」という言葉がなかなか出てきません。「ありがとう」ってなぜ大事かという、そこには7つの効果があると言われています。私も知らなかったのですが、「感謝」というのは誰でも分かるのですが、例えば以下、「相手の隠れた才能を引き出す」、「同時に自分も変わる」。他に「許容」、「承認」、「信頼」、「尊敬」、そして誰かの役に立っているという「自己有用感」。こういった7つの効果がありますよと、とにかく言葉はタダですか

ら、私たちも、1日1回言えば、自分のためにも、言われた側も、幸福力を高める効果があるとされているので、どんどん使っていきたいですね。

3つめは中野区の資源ということと考えました。区のホームページからの情報ですが、中野区には33万人の人口が住み、性別、年齢、国籍を問わない、インクルーシブの場です。いろんな団体もあります。スポーツ団体、地域サークル、学校、地域活動センターと児童館もそれぞれに19か所あります。私も地域活動センターに週ジムとマッサージに通っており、とてもありがたいです。これだけの拠点があって人がいるという視点を持つことが大事で、むしろ無限にあるというくらいの発想でいいのかなと思いました。

4つめはこれまでの連携活動の見直しについてですが、やはりPDCAサイクル(計画・実行・評価・行動)に基づいた改善活動をしていくことです。これまでの中野区の連携協定、民間企業、放課後の子ども教室等々、多くを実施されていますので、こういったものを毎年見直していくということが大事ではないかなと思いました。PDCAというのは見直すことによって、目標や行動が明確になる、課題が発見しやすいというメリットがあります。特に、中野区が放課後の児童館を拠点にした子どもたちの居場所をつくる取組が非常に充実しているなど感じたと思います。

5つ目に地域住民が主体となる取組例を調べてみました。茨城県は、毎年ホームページで連携事業を公開しています。牛久市では、地元をよく知る住民を推進員に任命し地域連携推進委員会をつくって、活動しています。

地域活動というのは、それに参加する住民側にも安心安全な住みよい地域になっていくなど、自治体と住民の双方にプラスがあるということをお伝えしたいと思いました。私もこれから少しずつでも、できることを進めていきたいなと思っております。以上です。

区 長 地域の資源がたくさんあるということで、その資源と学校をどう結びつけていくかということだと思いますけれども、そこについて、どういうコーディネートが必要で、そういうのは誰がやるのでしょうかね。

谷 口 これは地域住民の方で、さっき申しました連携推進協議会みたいなものをつくって、中野区もそうした協議会を作られていると思うのですが、そういったところに、区のことをよく知る住民の方に参加してもらい、協力を得ながら進めていくというのが、良いのではないのでしょうか。

区 長 地域にもそういう資源がたくさんあるということですか。

谷 口 はい。さっきも待合室で候補の方と話していたのですが、こういったことに応募しようという人はそれなりに意欲がある方たちですから、そのような人たちが集まって話し合っても、何か1つや2つ、アイデアが出てくるのでは

ないかという話も、ちょうどしていたところでした。

区 長 児童相談所でずっと働いていらっしゃるとお伺いしたのですけれども、今、地域と子どもの関係というのはどういう状況になっているとお考えですか。

谷 口 今、子どもというのは、なかなか地域の方が手を出しにくいというか、触れあいづらい環境ですね。いろんな事件や事故が起こっているので、声すらかけづらいですね。学校もどちらかというと、閉鎖的になっていますよね。部外者が入ってこないように。地域住民と密なる関係ではなくなっています。だからそこを、何とか改善していかないといけない。その拠点づくりとしては、児童館や地域活動センターなど、そうした地域拠点に住民がもっと参画して、子どもたちと触れ合う場所を持っていくというのは大事ななと思います。

区 長 とすると、その学校というか、その地域と学校が連携することによって、そこに学生も関わることによって、大変な学びがあったと最初にそういうお話があったけれど、そういう機会をたくさん増やしていくということが、今後の教育では必要だということをおっしゃっている。

谷 口 必要だと思います。大学側もそれは積極的にやろうとしていると思います。実があるというのを、大学も分かっていますので。

区 長 そうすると、では中野でも大学は、学校はたくさんあるわけですから、そこを活用していくことになるかと。

谷 口 できると思いますが、私は小学校を出た中学生や高校生も、地元の小学校に出てもらって、土曜日の放課後教室で、小学校3、4年生の算数や国語の力をサポートするような補修サポートみたいなのができればいいなと思っています。